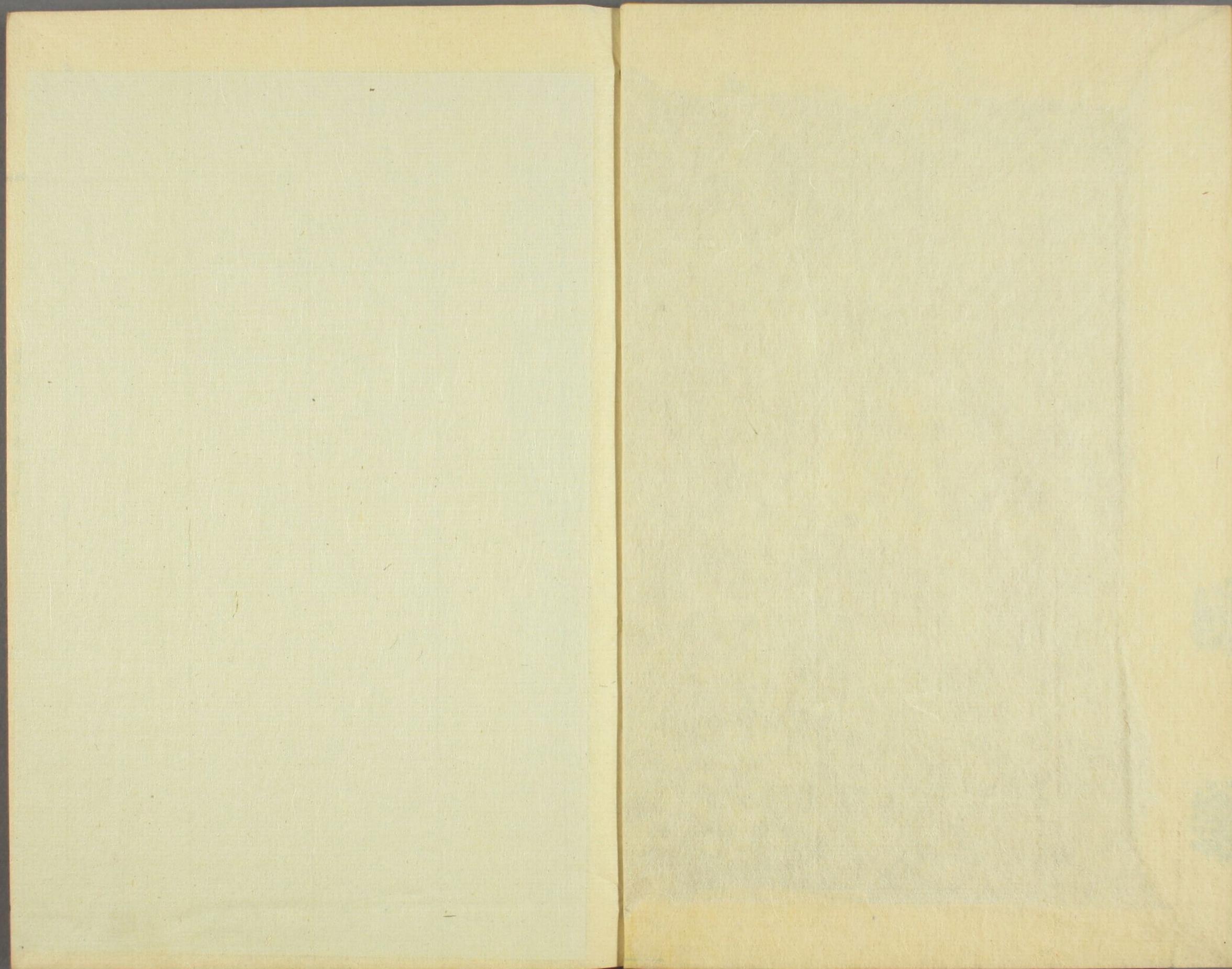


竹永翁物語解

五





よはれきこえよりかきか姫月のひまらうりわ。
えいおのほろもおのほろもおのほろも人の月を
いふハいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

○春の始より天より昇る其年の春より赫映姫月都より帰ぬべき
催しれをなる由なり○月の面白く出るをいふ写本よりいふこと
あり明石巻より十五夜の月おもしろく静なるは鈴虫巻より月や差
揚と更ぬる空面白きにわたり何と空晴く景氣はよむと云と○常よ
る物思はるさよなりハ姫ハ本月都の人をいふ常より月を見て
ハ故郷を恋る意をいふ物思やなりをいふ
此更ハ人知非ず此春ハ常より殊に

物思の増えざるに見えさるるなり○何れ人のハ姫より近く在人
お中より又或人のなり古板本の字なし此のハのハ通る制しは
ども一係まり○月の貌ハ古板本写本の字なし須磨巻より八月月
甚花やのちい今夜も十五夜なりはことと思し出る殿上ハ御遊恋
し所はたがめゆりし思遣はよはしきも月の顔は
はよしまゆふ二千里外古人心と誦しおの例の涙も止めは
云夜更けりぬと聞ゆは猶入はる程ぞおし慰さむ回
あそむ月の都ハ遙かゆはもハ此の文を思ふ延て書ふの如し
狩月の顔と云更明石巻ハ御法巻ハ
十七も出るなり○忌更とハ後撰
恋ハ月を哀と云ハ忌なりと云
獨寐の侘し手休り起居り月を哀
二人の有りはとみ人不知

と忌むかのつゝ。此哥小町集ハ中絶ハる男の忍て来々隠て見け
 けと篋子子なるのむとバ男忌那。宿木卷子。中君二条院。老人どもな
 る物と云を不厚兒もくとあり。宿木卷子。坐処。老人どもな
 ぞ今ハつゝもむひ月見るも忌むる物と云。白氏文集。贈内子莫對
 月明思往。更損君顏色。減君年。○せひしつれどもハ姫子仕る
 婢女など月見ゆふなと止る由なり。制字の音なり。字書子之世切法
 度也。禁制也。断也。止也。なぐ註も。音なり。○やもすれむハやもかく
 ひと云。やもやもすれむと云。意なり。夫木集。雜九。正治二年百
 鳥哥。そ寂蓮法師。かすれむを雪の深山。鳴鳥の思定をぬ身のゆくハ哉。○ひとよ
 ハ月を見て云。諸本人さるも月を見てハとを類本子従く改つ。人
 け不見隙と云。更なり。古今。春上。暮と明と目づれぬ物と梅。蒼いほの
 貫之。

人間子移ひぬ。て。落凹物語。女君の更。典藥助子語。んと思人
 間と云。つち。て。の。

七月のももつ月よおろそせも。物思ひ。け。ま。なり。近く
 け。つ。ほ。も。人。の。け。の。お。ろ。そ。せ。も。物。思。ひ。け。ま。なり。近く
 月を思。つ。ほ。も。人。の。け。の。お。ろ。そ。せ。も。物。思。ひ。け。ま。なり。近く
 月を思。つ。ほ。も。人。の。け。の。お。ろ。そ。せ。も。物。思。ひ。け。ま。なり。近く
 月を思。つ。ほ。も。人。の。け。の。お。ろ。そ。せ。も。物。思。ひ。け。ま。なり。近く
 月を思。つ。ほ。も。人。の。け。の。お。ろ。そ。せ。も。物。思。ひ。け。ま。なり。近く

○ともハ諸本十五日と書り万葉。卷三。に不盡の嶺子降ぬ。ふ雪ハ
 六月十五日消者其夜降。と。と。何。十五日を。と。と。訓。と。字書子説
 文云。日月之望。作望。瞻望。之望。作望。月滿。與日相望。以朝君也。从月从臣

云意なきやうに類本は契なりたるよとある宜して字なきは悪し○
此世界よとあるが来りける天上ハ尊タフト此界ハ界イダキとあるて来
と云るハ差向ゆる翁と敬ゆる言なり。此下は字校本は其ハさとの
しに加つるの此ハ依て来りると結ぶるなり○十五日ハも
ちと訓べき更上よ云と此ハ中旬と廣く云るハ非て正しく其一
日と指さり○彼もこの國よりハ姫の本國月都なり類本もこの二
字なし○此のハ還方へ令向の意ぞ○こんぞ此詞はつひの更ハ
上解四の廿七丁下十三ハ罷カクなんとするといふ下も云へ○きり
びハ伊勢物語八十ハ老ぬまバささぬ別の有と云を弥見よく欲カシき
君哉とよめるささぬに同じ避サリ直ナガも更不能と云ときて此の詞續

俄なるやうなればささぬハの誤のと云しと本居翁も鈴木氏もささ
びめて宜しと云はるもと然サ然ラズと二ツなるの有ありと後に
類本を見ればささぬ罷ぬへけむハと何とぞ諸本皆ささぬとみり上
る此詞の捨難くささぬハのこもくハ語勢よとく聞かれば上ハ詞脱
るふもささぬと思ふささぬと○悲キ更マとハ心惑らしぬん物ぞと
る同意なり写本は更との傍にさと付り本行の終る宜し○
此春より云ハ上に月の面白く出づるを見常よりハ物思さよ那
ささぬハ此更なり
箱ハコこハ何ナニぞよと云はるのいさよそ廿のゆかりんけきと云り
しかぞシカ葉ハ後ノチのノチおのよそけきと云しとささぬハけきと云り

あゝやうなむしあつていふやうの子を何人かいふもあつていふ
はるかにゆゑあつていふもあつていふもあつていふもあつていふ
あつていふもあつていふもあつていふもあつていふもあつていふ

○なごふ更を宣ぬよごは姫が我ハ月都の人なりと云るを不諾思
もあつていふもあつていふもあつていふもあつていふもあつていふ
もあつていふもあつていふもあつていふもあつていふもあつていふ
附するハ菜種の大きと云ふ不續とてあつていふもあつていふもあつていふ
えハ古更記の八千矛神は御哥ハ阿夜尔那古斐伎許志とて傳へ
勿戀詔ひそと云むが如し是ハ人の言て我ハ令聞意より云るなり
然まごも其言人を尊とて云時なりとてハ不云言なり又中昔の物語

文をよむ申と云はよと聞やと云ふこと常多し其ハ尊む人了申と
のこ云とては古言の伎許須とハ使ぎよ表裏の違なり 今人の古
使ぎよと不知きとてゆとゆと一ハ心得又人の已とあり此
ハ對て言と云こととをきとゆと云なり甚くひびくことなり
きことハ俗に申とも省てアスとも云如く意ハなごて敬く徒附添
る言のよとていふこと云類なり ○菜種の大きとハ始
初竹中より出時三寸許なる人とて此ハ殊更ハ小さく譬て云
ふやうの我ふけ立並ぶよごハ幼なりし姫の翁の高さよ立並ぶ
やうの字を加へて心得べし又我ふけはちよ並ぶて何れも有べ
し空蟬巻よ 源君を見違 民部の御許をのりけしハあゝぬや
おろけは哉と云丈高き人ハ常に笑はることを云なりと老人是

○赫映姫乃いそく云い余ハ月都の人として其國ハ今現に父母在ぞ
とあり抄本の字よくいふとある○片時のよとてハ類本ハ間と作
抄本ハあつてとあり字本ハ何ひぶとあるよけきと明石巻子源
の秋夜の月毛お駒よ我意る雲井よかり終時の間も見えとるに後
く訓つきて智度論卅五ハ四天王寿五百歳人間五十歳為四天王處一
日一夜亦三十日為一月十二月為一歳以此歳寿五百歳為人間九百
万歳猶抄薄莎王五願經月支支ハ無思想天の寿八十四万劫わくと
あると思ふ云ふぞいし○數多の年を経ぬるよ云い下四下ハ翁か
りや姫を養ひたる更廿餘年よ成ぬと云この字一本は後く加つ元
も宜し○父母の更もわづらひ久しく此界ハ在る終ハ本國の兩

親の上とも不出忘ふるやうも在しとなり始ころもを子とも
と云ふのと思しハ非び○わづらひハ馴を延ふる言あり姫ハ天人な
れども此竹取の翁姫を親とて久しく馴睦ナツミ由なる○いみじか
らあつてちもきび按ハ此上に月都ハ歸らば更なる云一句必脱ハ
こと聞ゆさるハ下九ハ彼都の人ハ清ケラも老もきび思更もなく
はるわりある所へまのさすもいみじくも信づべとを同意な
る月都ハ甚とてゆく此世界ハころろ勝エチと又父母の座坐本國
のまハ疾歸らよほコトワリき理たるれども此世界ハ馴親つとハ父母の所
ハ歸らば更を嬉しき心ちもきび今別きん更のこ一向ヒタスラ悲しと云
意なるべしハ甚しき意なるれども四下此ハ俗ハ結構ナル更

トモ不思と云音なり 解四の三 十丁可考 ○悲しきのこなしあるハ鈴木氏ナ

と云言脱きしと云云終しハ從テ補フ ○き終どおのの心なり

ハ余ハ歸まりしと思ふもども月都の迎へ聲ニ難ク終バ无為便天

ハ鈴木氏云此る字銜の如く聞ゆ終ど下りことよわが歎息の意を

含ゆる一格なりと云終き上 十一丁右 引ゆる空蟬卷に是をきくぬ

何りきくると何る同格の言なりすすハ為なり上 御幸 許さし

と云と有子同し下 廿五 彼國の人來ハ皆崩れんと寸と何るハ此

子同じくたんと云て末を係ゆる詞めく上 行幸 消云ちんす 此卷

右迎にあつてこんすと字なきが 濁 音ハ為非びぞ通じく副

る言もく元來異言なり終ども意ハ大氏同様子聞しなり大和物語

惠周法 オチ 行ひし深き山子入ちんとす 入 と云くいよけと宇治拾

遺 十 寺の別當 淨覺の夢子見るや我父の別當いし老杖

はきく出來て云やう何きて末の時ハ大風吹て此寺倒れんとす 倒

シ然子我此寺は瓦の下子三尺計の鯰とてなん行方なく水も少

く狭く暗き所子在る浅ましき音し目となん寺倒れバ壊

庭子這何るが童部打殺てんとす 殺 其時汝の前子ゆの

ベシ童部打きびと鴨河子放てよと云此なんとすと云言

いと云意と聞も罷なんといはるハ罷べし崩れんとハ崩べしなり

猶玉蔓卷子 太宰小貳病中 我と打捨まりていのなるさよん

に玉葛の叟を

のんきせむふ帝の臣子仰て令遣ひよと云地の詞あり
異^な然を校本よはるひよとをハセとのしるものう此言
下にみふと云言不添例なりと師^五云^五後撰^二恋^二長明親王の母
お更衣里よ侍るははける延喜御製よと云^三恋^三鉤殿
のみこにはあそしける陽成院御製はくはる帝の御なれ
と遣給ふと云不云なり○髪も白くは類本よ從つ諸本ひどとを
を誤なるばし髪を閣^{オキ}と云へき非^レ浦島子歌よ若かりし皮
も皺^{シワ}ぬ黒有之髪毛白班奴^{シラケヌ}と土佐日記よ頭もちけぬとあり○
目もろくはけとハ甚く泣傷て爛^{タガ}らるるなり字書に薺^{ヒツメ}結切
音蔑目赤也矚^メ目赤貌玉篇よろくはめと訓と○翁今歳ハ五十計

なりは[。]類本なりし[。]上[。]の段[。]子翁七十[。]餘[。]と[。]下
迎の人[。]に赫映姫を養ふとあり[。]更[。]廿餘年[。]子成[。]ぬと[。]を[。]五十計[。]と
云る[。]の不審[。]よ就[。]く左右[。]子論[。]よ健冬[。]の云[。]く翁七十[。]子餘[。]ぬと[。]ハ自[。]己[。]
云る詞[。]あり[。]実[。]なり[。]此[。]ハ[。]勅使[。]の詞[。]なり[。]翁[。]が[。]齡[。]先[。]く[。]ハ[。]五十計[。]なり[。]
と見[。]ふ[。]し[。]の[。]今[。]見[。]ふ[。]ハ[。]物思[。]よ依[。]く[。]急[。]よ衰[。]へ[。]く[。]老屈[。]なり[。]と云[。]る[。]よ
と[。]勅使[。]の[。]推量[。]言[。]なり[。]は[。]違[。]つ[。]ふ[。]よ[。]非[。]と云[。]と[。]鈴木氏云[。]此[。]説[。]よく[。]助得[。]
る[。]よ[。]如[。]ち[。]は[。]翁[。]も[。]於[。]心[。]ゆ[。]の[。]按[。]よ[。]是[。]ハ[。]作者[。]の[。]取[。]弭[。]なり[。]過[。]と見[。]ふ
ことよめ[。]運[。]さ[。]し[。]も[。]心[。]して[。]造[。]成[。]を[。]る[。]源氏物語[。]す[。]る[。]前坊[。]の[。]御息所[。]
の[。]年[。]紀[。]の[。]不[。]合[。]なり[。]と[。]後[。]も[。]何[。]も[。]更[。]なり[。]と云[。]れ[。]き[。]又[。]或[。]人[。]の[。]説[。]に[。]上[。]よ
七十餘[。]の[。]由[。]あり[。]下[。]の[。]姫[。]を[。]養[。]ふ[。]と[。]廿餘年[。]と[。]を[。]合[。]ふ[。]ハ[。]實[。]ハ[。]百歲計

更なるを轉クワリハ其シれ物と守モトやハ類ヒ云と其ハ番アヒタリ相更アヒタリて
 守より轉クワリなるなり此も意ハ守目モリメ子シすシてと云クガ如シ宇治拾遺
 卷シ子二人の子と舟の守目に載カきテとまた同シ浮舟卷シ宿直人
 四シわくかクるクさクめクバ於ケのク番シ當アてク是ハ狩更カ宇治拾遺
 十シ陽成院の釣殿に番シ者シ寝シりけシバ是ハ守の者ト○塗籠ノ
 二シ御所と内ニハ鈴木氏云ぬりシめハ古ノの室ハ遺製ナるベし屋の内ハ土と
 厚ク塗コめて今ハ土藏ノやハて器賤ト入置所ハちハりト見
 ゆ其用ハ今の納戸ハ同クるベしと云ク古更記傳卅新室ノ解ニ
 九テ牟漏ト云ハるク舎ハ云クハ異ク家の内ハもク奥方ハ在
 て室ヲとクも此意ナり升堂籠ノなる屋ヲて古ハ土と以て築テ
 味入室ナり云るも可ク知ル

塗コめク夏ハ涼ク寝ル處ナり書紀履中卷子室をヨドノも訓
冬ハ暖ク人ハ風ノ寒サも思ヒ終ル今世ニムロト云物ハ土ヲ以テ塗籠ル
るト云ク又後世ハ母屋ト云ハ身屋ト聞カるト又室屋ノ切リ
ふるもてもあハ書紀神代卷ハ无戸室ハ天武卷ハ御窟殿ハ御室院ナり和名抄古本ハ弁色立成云云云
何ルも塗籠ル殿ナるベし抄ハ白虎通云黄帝作室以避寒暑音七和師說ハ是ハ從ル終ル欵イニハ
又四聲云寢殿和名祢夜方言腰云乃止寢室也ハ師說ハ古ナりイニハ
後世ハ寢殿ト塗籠トハ別ナる由ハ次御汰卷ヲて知レし棟卷ニ
源君ノ藤壺ノ御許ハ忍テ物ハ人ハ繁ク我ルもあハて塗籠ヲ押シ入レ
らテてハ君ハ塗籠ノ戸細目ハ何クとハちハ押アけク
云クとハ稱名院御説ハ帳臺ノやハ死ナり又御汰卷ニ

坐也とある傳ハに蓋ヲを立テと云ハ師説ヲ上代ノハ戸ヲを常ハ候ル一
 退置ク蓋ハむトしてハ其ヲを持來テ立塞ユ急ナリと云テ流キ後世ノ遺戸ハ
此を便ヨシ排戸ハ上代ヨリ何ト刺ハ蓋ハる戸ヲ物ヲ釘刺固トし
證を引テ云テ流キりコのハ合ハ陰ナリ○モミハ下巧ノ意
解二ノ初下委云つ○何ノハ彼ヲ同シ今俗ヲも何
ノ云ト云ト但シ加ノハ鹿ヲもキ言何のハ打解ル言ト聞ウと鈴
 木氏云テ流キ空蟬卷源君ノ心何のシ人ノ強キ世ヲはシすモ
卷北方部屋ノ戸何のシ女君何ノシテあナ
北方何のシ何ノ櫛ハ人ヲ得ル何ノぬナリ此ヲ字ハ人ヲ

扣キ續ケるナリカハ戰ハ之騰切ナリ扣合ノ義ナリ○弓箭シ
 射ラ終ジ天ノ人ハ矢ノふル術ヲよシナリ○彼國ノ人コシ
 彼國ノ人キ同ト吏トコバトキたカと聊言ヲ替テ云ル面白
 ○開キハ人モ手不觸シ自然ニ開メべシナリ○
 吏ハ上十三子云つ○相戰スんとすルを類本スるルをハ悪
 ○武キ心シけル人ヨもあリ下ノまシのシ人ナしとまシお
 不得不戰ナリと云ルを再委シ云ル所ナリ
 翁ノりハやウ流キむル人ハ長キ所ニて眼ヲをシあ
 こシけルむル物ヲかハちガりおくル人ノまシのぬ
 公捨てクらハのおやウ人ノアシをシ心ヲをシはシら

たつちちちち

○翁の云や云姫の得ふこのまじなむと云よ依て吾武き由と云な
ま○こまを人を古本に來ふむむと云も宜し○眼をば摺にけふま
はづは破ら少し異る形丸きやの物を或摺之或押毀
意なり目けざる胸がむむと云赤染衛門集の虫の血をけづて
身ハ不着とも思初つふ色なきがへそ返虫たぬ心とぶもは
ぶきぞハ何の附ての思初べきとよめり○まの古叟記高津
賀斯多介の斯賀阿麻理の傳ハ其上ハ云る物を
差て其のと云ことありと云此のまの斯と佐と通音に同言な
るべし契冲法師の己之をさるまの天の人來バ其の髪其の尻を
同意と云まるとハ異なり

と云叟なり前説又按に平家物語も志や冠と打めを宇治拾遺も
東人の令似て何なるや虫の志や尻の火の著て小人魂とも見え
作る歌わつ哉於志や頬志や足志や衣志や鼻の嘲る辞あり此も必其
意なるべき處なるべしやと云と約直音まさと云るもあ
の古叟記傳の志夜胡志夜の解右の書どもを引く中昔の語ど
もわのハ車者の字音は如く呼しと聞ゆると上代ハ然る言なけ
れん志と夜とを慥に讀し車者の音は如くならんとい貫之の歌
必七言なるべしとハなりと云を思へ此物語作まる頃シヤと云
拗音を直音にサとも呼らんと思ふなり此も憎くもや髪志や
尻と云へし語勢なり此ハ後ハ前にさのハ斯賀と同意なりと云し
思寄つ

と鈴木氏ハ抄の頭書ハ逆髪なりとの説ハ後々との髪を取るとハ本
以手ハ大指ハ方として握と云れと逆尻ハ裳の裾と上方へ搔揚て尻
を顕え候と云歟又ハ尻よと臍臍を搔出る変と云の何をも生剥逆
剥の詞ハ本著く剛く健く云言と聞カ其之ハ意と見カハ穩なり
と云れま本居翁ハさのハ斯賀と同意と云説宜し大平も元より然
思へときと云遣ま終ま何ま吉らん今思まの終と已ハ猶逆髪逆尻
の説宜しとわびえん又シヤの髪など云例なくともや冠とや頬など
云終まのまの字なくともや髪とや尻と云べし終ま余後説ハ非なるべ
し○かたぢりわともまハ帝本巻空蟬君ハ始り逢ハふ処並くは人なるバ
こも荒ららるも引かたぢりわの葵巻六条御息所姫君と思しき人の

甚清らゆゑ何る所ハ往く世のく引おまごり現みも不似武く嚴き
頓心出来て打かたぢりまなど見ゆ悪霊ハ出カ葵上と責るなり定家卿鷹の歌ハ
端鷹のかたぢりたると鳥の毛と云とよみゆへハ搔薙ハ義なる
べし搔を凡く手先してする更ハ云此も其なる源氏物語ぬ
ハ唯其状もく大らあハ鷹の歌と此ハ毛と態とわしるとハ少し
異なる終ま搔薙落ハ意同じ○恥見ハチを愛ハ古史記夜見言令見辱
吾と何る傳卷六ハ恥を與ると恥と云ハ古語なりと類本に恥
とあり今ハ元オキ後つ○と腹立をりハと云くと省り
かたぢりわいゝゝかたぢりまのいゝまひを屋のいゝまひ
人どもけきゝゝにゝゝまひ

しかるに老衰する兩親を此界に捨置て升るは親もちを見扱
 てるに時々思出る恋しうべしと兼て後を推量て云置なり。此件
 能きひを此後追々衰へ行ぬるを其迄もえとてしめてやうに聞
 ぬべし。此見字ハ見扱の意あり親の恩に報の孝行をもきて捨扱
 やうにて天に升る本意なり。いと断まるなり。○と云くなくハ上
 せ給と己の心ちひ羅なるすと云く諸共しうべし泣と何る
 同意なり。されば此て字を合めく省するのとも思へど无くハ聞
 え難は終に泣と云言補つ。鈴木氏云此補も更なり畧くハきこえ
 ざるべし。泣と云くき処なりと云はき。今ハいしうハ
 上は何れはなぐとなくと補つ是めく足ぬべし。

たきね會いぬまよこやなまきむのいそ龍をいひあふる使
 りもさすあふるいそ龍をいひあふる使

○胸痛きこころの心を苦むと云く。古叟記須佐之男命段

心前をむちまきと訓と○なまきつよひそハ勿宣ぬのそと云べき処

なり上龍玉の段の段まをぢらわまをぢらわすと云く同じ○なまきと云く

不使するハ姫の彼都み人の清らうくと云くと受く翁其子答る

と○さつらじハ障と云くの意なり解一の升九丁可考防戦づき人多くて不

負へき勢ひなれば天の使も此方の障といふと云く○禰と云ハ

靈異記ハ惻ソク子タカウガイ慷慨ミテ子タテ字書ハ惻痛也愴也慷慨激昂之意字鏡に

惻ニハ憂貞伊支止呂志又称太志字書ハ惻念也と云意なりと土佐日記二月枕冊子

よゆ〜ゆきと云ハ残念也と云意と聞〜る

か〜ゆち〜たよひあさ〜子ね〜た〜つりまあ〜の〜ゆりあ〜の
あ〜も〜す〜ひ〜る〜
は〜り〜て〜人〜の〜も〜れ〜と〜見〜る〜ほ〜る〜

○か〜る〜は〜姫と翁と物云交ハ間マなり○よひハ夜の淺キ
程と云と万葉に夕暮晚初夜な〜れ字と書と○子の時を〜り抄
本子子の〜〜ハ悪し○家の〜〜ハ垣より外と云と○光ふ
とを校本お〜え〜り〜と〜○望月の明さと云ハ天より降〜る人の
光なり類本を字なし此更と楚王夢卷マ 万寿二年八月十五夜 今宵の月ハ甚
め〜る〜と云置〜と誠マ明キハ〜有が〜〜は〜る〜

に今夜の月ぞ誠に赫映姫の空マ外〜ん其夜ハ月斯やと見〜る

〜り○〜る人のハ其處マ在合〜る人なり。裘を焼処 卷三 見〜る

み云〜大和物語 第列 の段にす〜る者マ物多〜賜〜ん〜と在人〜

云けまバ宇治拾遺 十 筆術あ〜人と 四 其八分ぞあ〜の竿を置加と

見〜る人皆〜う〜埃坪マ入に〜と〜り○毛孔〜見〜る程

た〜ハ天人の光あ〜人の毛孔あ〜も細マ見ゆる程と云りほ〜ハ

譬の凡を云言なり。伊勢物語マ富士山と喩ハ言マ日枝山と二十計

重上〜る程して〜り

大〜人〜
〜
〜

此も其如くなり○相戦を心もなりけり強云居る徒
 子戦する心も失をるなり○かゝる思發してハ惑ふ心
 を漸くして勵を發して弓矢を取立むとす然ハ手力失く心を勉
 めるかひもなりなり○なへハ字鏡子變癯瘠
 和名抄に説文云鶯訓阿之奈戸行不正也と有り○かゞありハ屈な
 り字書子屈區勿切正字通凡曲而不伸者皆曰屈と有り此ハ手の屈
 めるなり。字鏡子儂偃也曲也低頭也夫木抄源仲實かゝるや後
 方の園子若菜摘かゞまり何とく翁姿み。按子世久豆ハ背の曲なり。
 加ハ方留ハ背子も手子も云べし儂字も何れも用べし
 荀子子儂穀梁傳子曹公子手儂○心せのし記者ハ類本子心ざりまゝとありハ街の
 指とあり

多の人お中子ハ剛弱種ハお人在るも儼なる様みく心も虚なり。
 又心ハ發も終ども手攣儂て弓矢も取立えぬ。又殊に剛きの矢ハ放
 らる終どもえ射あてぬもをかりさうしハ賢字をさのしともか
 こしとも訓く愚なるハ鈍なり。古今集序子云心くを見ゆひ
 てさのしおちのぬりし知し食むとを此ハ心を張力を勉むる者
 なり。明石巻子雷鳴ひくめくさま更子云さ方なつて落懸ぬとみ
 ゆるに在限さのし記人なし。沙石集卷七大地女子追來に父下郎なり終ども
 さのし記者もて蛇子向て此女ハ我女なり母ハ繼母なりとあり
 ○ゆんぐのし念字の音なり。字書に念奴占切爾雅釋詁思也疏常思
 也親名念黏也意相親愛心黏着不能忘也とあり轉く堪忍の意子用

而居是奴也シテオレコトヲ傳ト白檀原官段兄宇加イガヒニ伊賀所作仕奉於大殿内者意イハヒニ
礼先入明レ自其將為仕奉之狀而シテ此言意礼オレと云ハ古コうべけ
まど宇治拾遺シハ兩フタなる用ヨウなり。神樂歌カ浪ナミ芦原田のいなつま
蟹乃やおの終ハと婦メと不得エとやヤ古今コノイマにニ足引タビお山田ヤマタのそ
不フつおの終ハと我ガを欲ホシと云ク終ハと宇治拾遺シ十ト生ナマ賚シを
供ツケと止ト此コノ犬イヌどもを取入トルと云クおの終ハと此コノ日ヒ比ヒ勞イロより飼カつカ
ひもて此度我命コノトキニかゝ終ハおの終ハと云ク猿サと引ヒ伏フ其コノ猿サを俎ナ
板イタの上ノ引ヒ伏フきキ首カをカとカと云クおの終ハと人の命ヒトノイデを断キ
完シおとを食クむとすル者モノハ斯カクであるナリと志シや首カ切キて犬イヌ飼カつカんと云ク
むク又マタ同ドウ卷マキ子コ應オウ天テン門モンの火ヒお更シ頭カる段ダンいハて情ナなく幼コ者モノと加カくハ
に出納シと舍人シヤニンと口論クハする処トコロにニいハて情ナなく幼コ者モノと加カくハ

爲スるルと云フハ出納シ云フやヤお終ハ何ナニ更シ云フと云フ我君大納言ワケサのノ於ケ
てシおせバと舍人シヤニン大オホ腹ハラ立タてお終ハ何ナニ更シ云フと云フお終ハ大納言オホナツコトと
豪家ガウケに思オモはるおのノ主ヌシハ我口ワケクチに依ヨる人ヒトもてお終ハのノ不シ知ラぬ
我口ワケクチ開アケくハおのノ主ヌシハ人ヒトもて有アるナんやナと云フ是レハ伊賀イガの傳デン師シ
記傳キデン十九ジュウク云フ伊賀イガハ阿賀アガと通トつとて於能礼オノレとハ自己ミヅカラと云フ稱ナるル又
人ヒトを賤シしめクと云フも用ヨウひ意礼イレとハ人ヒトを賤シしめて云フ稱ナるルと今イマ世セ
ろハ自己ミヅカラは更シを然シカ云フ此等コノトウの例レイを以モ見ミまハ阿賀アガと云フも自己ミヅカラの更シな
るルと人ヒトを賤シしめクと云フも用ヨウひしシもハ是レ又マタ今イマ世セも然シカと云フ終ハま
○むウあるルとハ写本シヤホンに従シて字ジを補ホつツ○何ナニとぬルハ古更記コシハ千チ
姫段ヒメダンハ上ウヘハ美ミ乃ノ阿多波志都アタハシツと見え雄畧記ユウリヤクキハ與ヨ一夜イツヤ而ニ娠ハと見えと師シ

くて補添つるまじし此文詞脱字誤字をとりて後人善本と得て改
てよろし猶本居翁ハさるも之傳ぐごとくまほしと云はしるど无
とも聞えハすれどさそめよつ〇過別ぬる更すぎとハ此世界を過
去く天上子帰と云く人の死も同じとぬと云もすきいぬと云と約
する言なれば全同意なると思ひしこハ例の歎息は意を合する
なり〇かへゆくハ今の俗も云も同じ其更と打返しく思ふ由なる
〇ほいハ本意の字音なり云くきんと思入る更の志おかし
と本意と遂と云其意不達とほいなりと云と此も姫の心ハ歎の
せ奉るぬ程まで侍りまほしと思ふ其本意不達して心も何ごと
月都は還ると本意ちくたむと云るなり〇かめこハ形見なり

人と成る後其人の持つる物著つる衣などを見れば其人の面影み
見ゆる由の名なり万葉十に商變領爲跡云御法アラハ有者許曾吾下衣カシ變
賜米右傳云時有所幸娘子也寵薄之後還賜寄物俗云可於是娘子怨
恨聊作斯歌獻上遊仙屈文成十娘は別時遂喚奴曲琴取相思枕留與
十娘以爲記念是ハ義を以て訓と何り歌ハ甚多し今不奉〇月の出る
夜ハ云ハ姫今月官殿に還月中と住死とすはハ月を見遣をけ
とぬり〇空よりも落ぬてハ天よ昇る道は空も姫も別の悲し
さよ心惑て墮落ぬてハなり
天人のすまもももハ宮ある阿まね羽衣いり又あハ
不死の糸いままと一人の天人ハツボささるけり

げ今世召上らばよと云うて嘗め一み意なり○穢き所の物云
此下界ハ穢き由りて其所の物食ひひまば心ち悪るるばらば
清き天上の薬を嘗めば其心も爽やば身も清きはる由りて勸む
なり○もてよりつばむい薬を持て姫の方に近著寄なり○いさ
あゝ写本はまづあゝ○少しハ白切て薬を少し包まん係ま
某を形見とて入非じ○形見とて脱お衣ハ類本入おきぬふとあ
びハ无も悪のじ上ハ脱置衣を記念と見ぬて何其衣なり
○清きまをい何れど下ハ翁姫薬も不喰何れ少しハ遺き
なまほし
清きぬをい何れど清きんとい其時かぢやひめとて
まて

とつひに衣著つゝ人をもて成なりとらふ物一さいひを
清きとてあつひに何れ
○御衣ハおんどと訓べし写本みそと何れハ然訓もよけん○著
もんとい從つゝ天人彼曾入る羽衣を取出姫著ると
すゝなり○暫しまてといひハ抄本は役つ諸本とりよと何れ○
きぬ着つふ人ハ心異り成なりとらふ諸本きせつふと何れ此羽
衣を著れば此世界の心を変て天上界の心ハ化更み下天の羽
衣打きまをつば翁を愛し悲しと思しける更も失きぬと有更
なればせ字必衍なり故除つさて此のとりよと云るも上のとりひ
ても无てあゝまゝし上ハ他死赫映姫と申人ぞおしよれ

ご心け供なすぬ身と云意めて斯やうも間無く天は還べくしつま
でも此は居難き由なり○心不得思食はくめどもマロエズ帝の大御心
深く召しうども難面申て終り召に不應しと何なる心よのむげよ
物の哀も不知者歟と不審思食けんちり心えべし他者の意は
趣を自己不知得と云と○なめげの貴賤を押し並する意よ埃囊
抄は平字をなめしと訓る意はくめし十六繼躰紀十六は輕字を訓万葉
卷は無礼ともふなナシカシコシ無礼恐と作るハ義は後する字なり帝をミカド
六は無礼と無礼と作るハ義は後する字なり帝をミカド
无礼輕氣は執成者ぞ思食つて其故ハ如此煩るしき身も付
まばと斷るなり○思食とくめし終り大御心は然思史大座ア
しはくめし思ふの余の○心よもつりはめしとちりなりハ滯滞る

意もく心係りよちり云由なり○哥今りゆとい今を限と云く此
界を離る時を差もり伊勢物語十五に紀有常の妻
を其文の詞かしく今ハ退ると云く○天の羽衣き時ぞハ羽
衣を着けぬ此世の心も轉變ゆえきとす限は臨る君を思出と
なりをさハよと云く万葉卷二時時と書てさりくし訓る
と師ハよりくし訓まき又三節祭とをさりけあつりと訓る谷川氏
をさりハよりの轉なりと云く然まばよとの方古くて師も然
訓まし○君を哀と思出ぬハ懇慕るものし物と心剛く官
仕をさるしをいやくし心苦し思出奉るとなる鈴木氏云一本
は思知ぬるとも宜しと云はま又入ぬる出るなりなる本も

剛者ツヨモノの意と心得ず刀鋒の属は名なる更とい不知なりぬ皇國よ
も古其人と指す都波毛能と云る更ハ元ナカとき書紀なり人に云る
兵字より卒字なりと然訓るハ誤なり又其をイクサビトなりと訓
る是を宜しきと有りともは兵卒をツハモノと云ハ此物語の頃よ
こ上の方遠くぬ世より言なるべし○其山をバハ上の例より従
くハ字今補つ○富士山フジノヤマハ名附くハ此名を負きつりと云其義
定サダなるべ抄は儀タシの自己の説ハ此物語ハ例の寓言より兵士
富トムと云よ書なるせりと云こげツハモノ兵者ども數多具して山へ登るよ
こやんとあはれハ此説の如くきこえ又此御使ハ不死薬を燃すモヤの主
ふモノ業ノあり兵士ハ其ツキに属モノする者なり其を名オを負クんやうら

くと見るとハ不死の意と聞ゆ頭書よ昌意を救命ウケを奉て不死薬と
焼し山なるは不死の山と云と云るなるべしふじ山と名付け
ふ其烟ケと云るよ心を著べしと云るもさる更なりさて富士フジの濁
音を不死の清音とつよ云るも如何イカバ〜聞かれど上ウヘに鉢ハチと捨スツと云
を恥ハヂを捨る更マシよ云なし安倍氏アヘノウヂなるよ依ヨく何ナニなりしとせり喰クつ
以タ堪タつと云ひ又歌の云掛カケなど清濁をさるぬ更常なり大和物
語モノを狩カみよこ来る君待と振出く鳴ナる山ハ秋ぞ悲シしま鹿シカを志
賀山カガに云掛カケつり此物語モノよ云シの由縁ヨシありと云る名義ハ只一興カクよ語
まゝマに本より寓言なるは大秀ハ二ニなり取トルてんニハ其故
こ此作者の工コウあり富士フジの字義ジも叶ツひ不死フシの言コトも叶ツふべく作

成きよきもいふべしと思ふ不死と取方ハ表士ヲ富ト云義ハ裏ホ
コ都良香の記古老傳云名富士取郡名ト何ハ實ナリ
そはくわいといやぶこきりやゆへとのわいといふ伊弉諾

○其烟ハ不死藥を燃しゆる烟なり 猶不尽山の燃る ○雲の中へ立
上るとぞハ天ヲ近き高山まで令焼ゆふと彼藥を天上に返しゆふ
御意延なれば其藥の氣け残るゝと聞ハ烟ハ絶立上ると云中に
入るとあり ○云傳ふるハ不盡山の烟ハ立ハ此様の由縁とて語傳
ふりや云意やと

竹取翁物語解卷五 大尾



跋

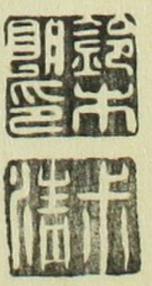
田中荏名翁之解此書校對數本從
其善者辯闕誤釋疑難或旁取
諸家或專出獨裁詳審精覈殆無
遺義不徒有大造于此書亦可以使
蒙士由是通雅馴遂進雅道其

○竹取翁物語解跋

功亦偉矣哉。當解之方。彙嘗以示
余。亦題贊一二。既成。乃為題其後。如此。
若此書之古而尚。與公翁之學以原。則
具于解典序。今不復贅焉。

庚寅春日

離屋鈴木胤



文政十三年

庚寅春發兌

尾張桐園藏板

尾州名古屋本町十丁目

製本所

松屋善兵衛

